

何松庵乃夢

谷崎
山崎
松子

倚松庵の夢

©一九六七

定価 四八〇円

昭和四十二年七月二十四日初版発行
昭和四十二年十月十四日四版発行

著者 谷崎 松子

発行者 山越 豊

印刷所 精興社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替 東京三四

倚松庵の夢
目次

銀の盞

五

湘碧山房夏あらし

三九

倚松庵の夢

六三

倚松庵の夢

六五

細雪余談

八三

源氏余香

一〇四

終焉のあとさき

一二七

「吉野葛」遺聞

一四八

秋声の賦

一六一

夏から秋へ

一七六

桜

一九一

桜襲

一九七

薄紅梅

二〇五

残照の記（あとがき）

二二五

扉題字 行成筆蹟より集字

銀
の
盞

それは、まだ戦雲の捲き起らぬ平和な昭和八年頃のことであった。一年に四、五回は、仕事の用件を兼ねて、お芝居を観たり、旧友に会うことを楽しみに、ふらりと東京へ出懸けていた谷崎は、或る日、思い立って出京、其の頃は丸ビルの五階にあった中央公論社の前社長の嶋中雄作氏を社長室に訪ねた。待ち構えていられた社長は、此の初めて「源氏物語」の現代語訳を試みる気はないかと口を切られた。かねてから古典物をもしも現代文に直すとすれば、源氏を措いて外にないと、自分自身思いついていた谷崎は、此の提案には大いに心を動かされたが、なにしろ五十四帖にわたる大長編の訳に着手するには、種々の障害があった。其の事に就いて「源氏物語の現代

語訳について」の中に、

最初に躊躇した唯一の理由は、その浩瀚なる分量にあつた。人一倍遅筆な私が、日に四五枚の進行が精々である私が、あの大部なものを訳し上げるのに何年かゝるか、かゝり出したら万事を抛擲してそれに没頭するより外に仕方がないが、他の雑誌社との約束もあるし、そんな風にして数年間を過すことが出来るだらうか、——それが唯一の懸念であつた。

と書かれている通り、これを仕遂げることは並大抵の努力でなく、又、此の上ない根氣を要する業であつた。

嶋中雄作氏は、其の頃出版事業に熱情を傾けられ、油の乗って来られたところで、体軀に似合わず、太っ腹で、押し切って行かれる強さも持っていた。幾年かゝるか知れぬ源氏の訳のために、私たちの生活の保証を確約され、其の上、谷崎が誤訳を

避けるために、權威ある校閲者を得ることを主張したのに対して、山田孝雄博士よしおを煩わすことを発議された。山田博士は此の仕事の意義を認められ、多大の熱意を示されたので、谷崎は百万の味方を得たにも等しい、と言って遂に此の大業に全力を注ぐことに意を決した。

思えば、前社長との此の時の会見が、今日の「源氏ブーム」をよぶ、重要な日となつた。

○

昭和十年の春、仙台の山田博士のお宅に威儀を正して、お教えを乞ひに出懸け、御意見を伺つて来たり、取りかゝる準備怠りなく、本当に筆を執り始めたのは、昭和十年の九月からであつた。

それから、机上に『湖月抄』こげつしょうがテキストとして開かれ、参考書として『岷江入楚』みんじょうにちそ、島津久基氏の『源氏物語講話』、明治以後に出版された口語訳の数々が、処狭しと書

齋の主の周辺に置かれていた。

その書齋のありかは、阪神間の芦屋に程近い打出に、庄家風の古めかしい家を見付けて間もない頃で、そこは私たちにとって、思出も一入深い家で、世間的な遠慮ばかりでなく、実際、かくれしので暮さねばならぬ多くの事柄が横たわっていた。

私たちは芥川龍之介氏を結びの神と云っているが、それには次のようなわけがあった。

谷崎とめぐりあう前の、最初の結婚当時は、私はいくぶん文学趣味で、芥川氏のものを読み、機会があれば会って見たいと思っていた。

当時の私は、家こそ新築の数奇を凝らした住居に迎えられた幸福そうな新嫁であったが、船場風のお店の旧習の執拗に踏襲されている家の中は、息の詰るような空気であった。

問屋街の本町のお店と本宅に分れていて、番頭さんや丁稚さんが交代で本宅詰として、お家様とよばれる、先夫の祖母になる人にお行儀を仕込まれに来ていた。

毎日々々どこかへ御機嫌伺いに贈物を届けにやられるお使いの丁稚さんの口上が、お家様の口うつしに復誦をさせられる。先ず天候の挨拶から始まり、「どなたさんもお障りものうて結構なことでございます。これはまことにお粗末なもので失礼でございますが」と其の口上のあいだ中、祖母は畳の上に丁稚はお縁の板の間に手をついて、日々些のかわりもなく繰り返されるのであった。番頭も丁稚も細かい河内木綿の縞の着物に、黒地の筋目立った織物の帯、それに紺無地の広幅の前掛という格好で、十二、三歳の丁稚の姿に、文楽の「菅原伝授手習鑑」の寺子屋の場の人形を思い出すこと屢々であった。女中さんたちは高島田に髪結さんが来て結い上げ、真白い「たけ長」を清げにきりりとかけられていた。上女中、中働き、下働きと分けられ、六、七人は使われていたように思う。一人色白のきりょうよしの上女中がいて、夫の身の廻りの世話をしていた。その他に三太夫が一人玄関に机を置いて頑張っていて、会計、電話の取次などをしていた。

この当時、時折画家の小出楢重氏が来訪、訥弁のとぼけたユーモアで、憂鬱を吹っ

飛ばされた。今も猶、真似の許されぬ面白さを忘れ得ない。

「細雪」の大阪のボン／＼のモデルと云われ、恐らく船場のボン／＼の最後の人であろう、と評された夫は、綿布問屋の商いより、美術品を買い漁るのに余念なく、大阪の北野恒富氏を後援したり、美術院の方々との交遊も多かった。北野氏と双方で知り合っていた関係で、紹介されたのが初まりで、結婚することになったが、結婚前には南地の名妓との噂も耳にしないでもなかった。

船場の御寮人^{ごりょうじん}としては当然なことであつたが、夫と二人でお芝居や映画を見に出かけることは「使用人にしめしがつきまへんやごあえんか」と云う訳で、何か口実をもうけて出て、帰りは別々に玄関をくぐらねばならなかった。そうした生活の中で私は全く手持無沙汰で、読書に時を移すよりなかった。読書にも飽いた或る日、つい突拍子もないことを思いついた。恰度、夫の行きつけの南地のお茶屋のお内儀が、芥川氏を知っている、と云うことを聞いていたので、早速来阪の機会に逢わせて欲しいと頼んだ。間もなく報せがあつて、お洒落もそこそこに、胸をときめかせ車を走らせた。

——その日のことは「雪後庵夜話」に詳細に語られているので、今更私が舌足らずのようなもどかしい言葉をさしはさむ余地もないが、芥川氏について少し話したいと思う。——

お座敷に招じ入れられた私は、芥川氏だけと思ったら、こちらは谷崎先生です、と紹介されてはっとしたが、直ぐに落着いて、初対面の挨拶を交わし、いさゝか上気しながら、先刻から続いていたらしいお二人の文学論を黙々ときいていた。

筋のない小説とかゞ盛んに話題になっているかと思うと、白秋、茂吉、晶子の歌が論じられる。よく暗誦が出来たものと感心して聞いていたが、私はあとにも先にも谷崎の文学論らしきものをきいたのは初めてのことであった。頭に残らないで耳をかすめて過ぎたのは未だ初心で上っていたせいであろう。今日ならば、頭の中にメモするくらい傾聴したことであろうに。あとで思い合わせると、谷崎は「饒舌録」で、芥川氏にさかんな論鋒を向けていたころであった。

その翌日であったか、南地のたしかユニオンとか云ったダンスホールに誘ったか誘

われたか愉快に踊ったのであるが、タキシード姿の谷崎の女性への敬意の溢れた礼儀正しさに、少なからず驚いた。

谷崎のダンスと云うのは、横浜時代の名残らしく、大変勇ましく、千代子夫人や家族の人が「ソレ機関車が動き出したよ」とその後もよく笑わされたが、突進型で、他の組にぶつかろうとお構いなしで、ちょっと目醒ましかった。それに背丈の加減が少しチークダンスで、最初は気恥かしかったが、馴れてゆくうちに余裕も出来て、興の赴くまゝにタンゴ、ワルツと繰り返し踊った。芥川氏とも踊って戴きたかったが、終始壁の人で、私は私たちの動きを追っていられる眼を感じていた。そして、美しく澄みきったその哀愁のたゞえられた眼が、絶えず心を捉えていた。

その翌年、芥川氏の自殺の報道——それは谷崎の誕生日の七月二十四日であった。ショックをうけて二、三日は涙がとめどなく流れた。——それだけの出遇いに過ぎなかったが——たゞ死を決意した人の眼は、あんなにも神秘的に見えるものかと慄然とした。